



CANOVA だより

58

2016年7月発行

文・写真_鈴木真由美 編集_星久美子・真野由紀 発行_光の子どもたちの会
Praia do Estevão s/n, Canoa Quebrada, Aracati-CE-Brasil CEP:62800-000
連絡先:info@criancasdeluz.org

NPO法人になって
団体ポスター
をリニューアル!



子どもが子どもらしく
子ども時代を
幸せに過ごすためには?

入会申込み用紙を お送りください

「特定非営利活動法人 光の子どもたちの会」となり、諸手続きなど雑務が増え、日本事務局においては今まで以上に多忙な日々となっております。皆様からのご理解とご協力を得て、こうして引き続き活動を実施できていますこと、心より感謝いたします。

支援者の皆様におきましては、入会申込み用紙を送っていただけるようお願いしております。まだの方はお手持ちの用紙に記載して送っていただくか、日本事務局までご連絡いただけますよう、お願いいたします。

久しぶりの長期日本滞在からカナアに戻って・・・。

カナアで活動を始めようになって丸16年。日本とブラジルを行ったり来たりの生活ですが、この16年間の内で一番日本に長く滞在した今回。久しぶりに日本の四季を堪能することができました。これだけ長くカナアを離れ、現地のスタッフに全てを任せる…ということが、こんなにも突然やってくるとは思いませんでした。少しずつ、準備はしてきたつもりですが、まさか今!というのが私、そして現地スタッフが率直に感じたことだと思います。

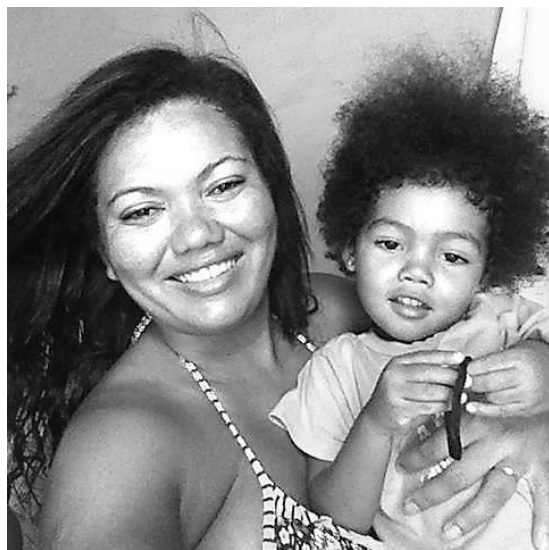
カナアに戻り、現地スタッフとのミーティングの中でどんな言葉が飛び出すのかと、楽しみと不安の入り混じった気持ちで迎えたこの日。一人一人、順番に話していく中で、全員に共通していたのは、「私たちの活動を運営していくために必要

なことが、これほどたくさんあるということによってやく気付いた」ということ。特に、市の認可園でもあり、子どもの権利委員会をはじめ、カナアだけではなく、アラカチ市内における子どもと青少年の育成に深く関わっている現在、今のこの活動（保育園や学童教室の運営）を継続していくために私たちがどんなことに取り組み、参加し、実践しているのか。そういった全てのことが、スタッフ一人一人の中でもようやく一つにまとまったようでした。

事務仕事が増えたおかげで、慣れない仕事のせいか、疲れていると笑いながら話してくれた彼女たち。とにかく今は、お疲れさま。そして、これからもよろしく願います!と伝えました。

世界へ羽ばたく！ 「光の子どもたちの会」卒業生

今回は「光の子どもたちの会」の保育園に子どもを通わせている
お母さんからの話を紹介します。 翻訳:鈴木真由美



Colay Santos (mãe da Sophia)
コライ・サントス(ソフィアの母)

保育園に通う子どもの保護者として

ソフィアが保育園に入ると決まった時、私の心は喜びと不安でいっぱいでした。なぜかというと、私と娘にとってこの新しい世界、新しい発見、学びがどういうものになるのか分からなかったからです。でも、それは素晴らしいものでしたし、その喜びは今も続いています。

私の甥達も「光の子どもたちの会」の保育園で学び、今、彼らは誰からも愛される子どもになっています。

この保育園に通う子どもの保護者は月謝を払いませんが、様々なことに参加します。保育園と庭の大掃除、遊具の修繕、そして、掃除道具の寄付。

季節の行事は私たち保護者にとって、子どもたちの成長を見ることのできる機会となります。なんてすばらしい活動をしているのでしょうか！

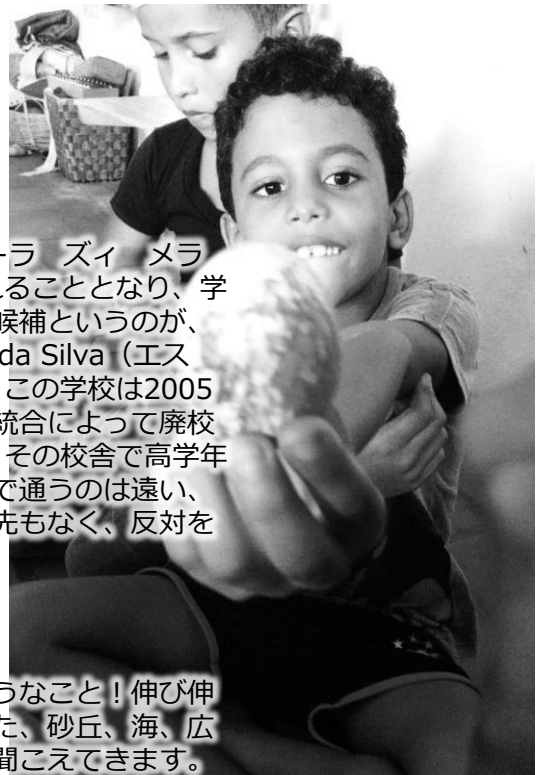
エステーヴァン村の中の「光の子どもたちの会」の活動は、私たち村の住民にとって、とても大切で重要な役割を担っています。だから、この活動が終わることなく続き、他の子どもたちにもこの素晴らしい教育を受ける機会があることを祈っています。

ここに全ての子どもたちの保護者を代表して、皆さんにお礼を言いたいと思います。ありがとう！

公立学校の仮校舎、 いつまでつづく?!

公立学校がエステーヴァン村にやってきた!

カノアには唯一の公立小中学校“Escola Ze Melancia (エスコーラ ズィーメラ シーア)”があるのですが、今年の初めより改修工事が開始されることとなり、学校を一時的に移転する必要が出てきました。その移転先の仮校舎候補というのが、1 km離れたエステーヴァン村内にある“Escola Estevão Pereira da Silva (エスコーラ エステーヴァン ペレイラ ダ シウバ)”の校舎です。この学校は2005年まで分校として1~4年生までが学んでいましたが、本校との統合によって廃校となり、2006年からは私たち「光の子どもたちの会」が管理し、その校舎で高学年クラスの学童教室を運営してきました。保護者からは「この村まで通うのは遠い、疲れる、大変だ」などの反対の声もあったようですが、他に移転先もなく、反対を押し切って村の校舎への一時移転が決定されました。



子どもたちは伸び伸び!

さて、3月にいざ開校してみると、子どもたちのなんと嬉しそうなこと!伸び伸びと、楽しそうに学ぶ姿。今までの体育の授業ではありえなかった、砂丘、海、広場での活動。「ここから出たくない!」という声があちこちから聞こえてきます。

移転期間未定…?!

当初3ヶ月の一時移転の予定でしたが、なんと、移転後2週間経った時点で、改修業者が工事を取りやめ、屋根のない壁だけの校舎となってしまった学校。まさかそこに戻るわけにもいかず、「移転期間未定」となっていました。私たちとしては当分の間、学童教室の高学年クラスを閉鎖せざるを得なくなり、現在は低学年クラスのみ運営しています。さて、これからどうなることやら……。

子育て日記より

日本に長く滞在し、ポルトガル語が怪しくなりだしていた次女。一方、長女は長い日本滞在中で苦手だった漢字を克服し、自信がついたようです。2カ国語を“聞く・話す”というのと、“読み書きができる”というのには大きな違いがあり、日本とブラジルの学校に通っているからこそ、この2つを十分に発達させることができた2人ですが、それにはやはり、『両国を知っている』『その文化・背景の中で生活している』ということがとても大きいように感じます。特に長女の場合は、幼いころから日本にいる時とブラジルにいる時では話し方や物腰が異なり、その土地に合わせた生活スタイルを送ることが自然とできていました。これは私から見ると、彼女の中に2人の自分が存在している、そういう感覚です。

学校生活は日本とブラジルでは大きく異なり、ブラジルではクラスで授業を受けるのみなので、学校以外の場で学校の友達と過ごすということはほとんどありません。また仲の良い友達ができても、子ども達だけで出かけることは安全面を考慮すると許可することができないということもあり、友人関係を作ることが、日本よりも難しいように感じます。そのため、小学6年生になる長女は、日本にいる間、友達と出かけることを大いに楽しみました。しかも彼女の年齢からみても、そろそろ家族よりも友人と過ごすことが楽しくなってくる時期でもあったので、こうした貴重な時間を日本で過ごすことができたことは、彼女にとって、これからの人生に大きな影響を与えたのではないかと思います。

日本とブラジル。異なる2つの国で生活する中で、子ども達は日々成長し、そこからたくさんのことを学んでいます。娘たちにとって、私には計り知れない大変なこともあるのかもしれませんが、今はこの生活を娘たちと共に有効に、且つ、積極的に楽しんでいきたいと思っています。

カノアに行ってきました＊Fui para Canoa

東海大学教養学部国際学科3年の谷田彩佳です。高校生の頃、小貫大輔先生に出会い、ブラジルへ行きたい！と思っていたのが現実になりました！そして遂に2月25日～3月15日までスタディーツアーに参加し、クイアバ、セアラ、サンパウロの3つの州を回りました。正直、ブラジルは日本の裏側で、公用語はポルトガル語で、日本ではニュースでジカ熱について流れてて、周りの人から男には気をつけろと言われ、不安でいっぱいでした。ブラジルに着いて、男よりも食べ物で太ることの方が気をつけろって感じでしたね（笑）

スタディーツアーとは、東海大学教養学部国際学科の教員が引率する海外研修で、実際に外国へ行き、訪れた国はどんなところなのかや、何が起きているのか、歴史的背景などを勉強します。今回私が参加したスタディーツアーはブラジルでした。実は中学生の頃、ブラジル人に恋をして、ブラジルに興味を持ち、大学ではBeijo Me Ligaという国際交流プロジェクトに入っているため、ブラジルや外国の文化にとっても興味がありました。

ブラジルでは、クイアバ、セアラ、サンパウロの3つの州を回らせてもらいました。各州で「アラビア・日本祭り」を開催しました。参加者にサウジアラビアからの留学生がいたからです。日本食を出したり、アラビア書道をしたり、日本って言ったらこれだよ！という出し物をしました。セアラでは、エステバン村に行きました。フォルタレーザ空港から車で3時間くらいかかりました。遠いとは分かっていましたが、予想以上に遠くて驚きました。着いたのは夜で周りは暗く、自分が今どこにいるかは着いた日は分かりませんでした。次の日の早朝、朝日を見るために家から出ると、目の前は海、後ろは砂丘、下は砂、上は大空でした。日本では経験したことのない空間でした。近くにあるパン屋さんでパンを買い、ハムとチーズを挟んで食べてました。

滞在中は、主にエステバン村にある文化センターの修復をしていました。建てられた当初、センターはパン教室や、図書館など村人たちが使える憩いの場でしたが、今は住民協会がミーティングをする場としてのみ活用されています。図書館にある本はほとんどが傷んでました。壁にも白アリがいたり、電気がつかなくなったので、配線を繋いだり、壁の色塗りもしました。村人が出てきてくれて、一緒に作業をしました。ポルトガル語は全く分からなかった私でしたが、コミュニケーションは取れていたと思います。



帰国後、実は今、私はブラジルに戻りたくて、帰ってきてから毎日ウズウズしています。特に3つの都市の中でエステバン村に戻りたい！という気持ちは強いです。カノアケブラダで先生たちとはぐれ、女3人で友だちや先生を探した時がありました。ポルトガル語は話せないけれど、大学の授業でスペイン語を習っていたので、分かるスペイン語とポルトガル語を使って、「日本人見た？」とずっと聞きながら歩いていました。網漁をしてるおじちゃんに尋ねたら、「エステバン村に日本人がいるって言ってたよ」と言われました。彼とは知り合いでもないし、会ったこともないのに日本人がエステバン村にいと知っていて、コミュニティーの繋がりの強さに驚きました。日本では、地域の中の家庭のことなど知らない人の方が多いと思います。コミュニティーの繋がりの強さであったり、人の温かさであったり、日本にいては感じられないことが多かったです。今はブラジルに行ったからこそ出来ることや、まだ知らないブラジルを知るために、戻りたいと考えています。

村の子どもたちと日本人*As crianças de Canoa e Japonês

6年ぶりのエステーバン村

今年3月、6年ぶりにカノア地区エステーバン村を訪ねました。理由は2007年に建設した村の文化センターの修繕作業をするためです。東海大学の学生がスタディーツアーの一環としてこの修繕作業の計画を立てためそこに参加することにしました。

6年の歳月は村の大人や私自身に大きな変化を与えないものの、子どもたちにはとても長い年月だったようです。彼らは見違えるように成長していました。この文化センターを建設当時、私の足元あたりをちょろちょろしていた本当に小さな子どもだった彼ら、彼女らが今では私が見上げなくてはいけない子もいるほどです。子どもの成長は食事や教育などの物質だけではなく何か彼らを成長させているのではないかという印象を強く受けました。

そして、あの当時子どもだった彼らと今は対等に話を出来るようになったのも大きな喜びです。一軒家の裏庭にプラスチックのテーブルひとつで自宅カフェをしているうちがあり、夜な夜なそこに集まり話に花が咲きました。過去に、ここに滞在した日本人の近況、村のうわさ、若者たちの進学や就職の話等、話題は枚挙に暇がありません。熱帯地域の夜は昼間の猛暑がおさまり、いっそう開放的な気持ちにさせます。

子どもたちの心の中の日本人

特に日本人の話になるととても盛り上がります。彼女たちは自慢するように競って歴代の日本人長期・短期滞在者の名前を年代別に挙げました。彼女たちにとって知り合った日本人は未だ心の中にしっかりと住んでいるのです。そして寂しそうに時々「でも、きっとみんな私たちのこと忘れてしまってるだろうけれどね」などといいます。

村の話題では、文化センターの運営に関して、不満があるようで一通り批判をした後、そのことについてどう思うかと、まるで自分たちの意見を確認するかのように真剣な眼差しで聞いてくるのです。どうしてこんなに彼／彼女らは私たちに心を開いて話してくれるのだろうと思いました。

ここには沢山のヨーロッパ人も来ますが、日本人と村の子どもの関係は特別に濃いものと感じます。ひとつには当然、鈴木真由美さんたちの運営する「光の子どもたちの会」の活動があり、この活動は村の子どもにとってとても大きな存在です。この活動が村に与えている良い影響は計り知れないものです。

文化に触れる

そしてもう一つはここに継続的に訪問・滞在する日本人の若者の気質にも理由がある気がします。ここに来る日本人は純粋な好奇心と何か協力したいという気持ちで来ます。ヨーロッパ人も多く来ますが、例えば、ドイツ人を例に挙げると、彼らの「自己」はとても強い。だから地域に来て協力はするのですが「ドイツ」的な個性はいつもあります。日本の若者は来てすぐ子どもたちと友達になろうとする気がします。「郷に入れば郷に従え」という言葉にあるように現地に同化を試みる感じです。来てすぐ子ども達と太陽が沈む裏山に一緒に行き、海に魚取りに出たり、子どもたちの家族と付き合う若者も多く見ます。子どもたちは日本人をお姉さんやお兄さんというより「友達」感覚で、カノアの自然のことを教える対等な(もしくはそれ以上の)存在になるのです。ある8歳の男の子は23歳の日本人女性を自分の彼女と本気で思ってしまったこともありました。それ程に私たち日本人は身近な(?)存在なのです。

そのことが実は逆に子どもたちにとって日本文化に染まる結果になっているのではないかと思います。文化や年齢などの隔たりなく付き合うことで、日本人が身近な存在になります。子どもにとって村の大人というのは保守的な人々で年齢差に厳格なしきたりがあり、そのルールをはみ出すことはできません。そこへ、しきたりの必要のないフレンドリーな外国人、日本人が来て違う文化、新しい価値観の息吹を与えます。彼らにとって新鮮で理想的な魅力を持った友達ができるのです。

日本の若者は、当然年齢も経験も上なので、子ども達に教えられながらも、実は彼らを包み込むように見守っているはずですが、その包んでいる柔らかい布は、実は「日本」という私たちも意識していない「文化」なのではないかと思います。子どもたちは無意識のうちに日本的なものを吸収して育っていくのではないのでしょうか。

日本人にとって村の子どもたちは、すばらしいひと時を一緒にすごす忘れがたい存在です。ですが、村の子たちにとっても日本人とすごした時間は幼少期の貴重な経験なのだと思います。今回村の若者たちと話していて、日本人と過ごした経験が確実に彼らの幹となり枝となり人生の大きな骨格の一部となっていることがよく見えた気がします。特に彼らの倫理観、世界観は村の大人と大きく違う現代的な感じがしました。

そして、これからも

文化センター修繕作業の日、村の若者たちは朝早くにセンターに来て私たちをせかすように待っていました。彼らの積極的に進んでボランティアをする姿を見ていると、ここに来た一人一人の日本人の若者たちが日本とカノアに友好の橋をかけていたのが見えてきます。このような結びつきこそ、社会をより良くしていく真なる国際協力なのだと思います。東海大学の学生と現地の若者が言葉を介さず楽しそうに一緒に作業をしている姿は異文化理解の象徴的な姿に見えました。



安藤 将
カノアケブラーダのボランティア経験者。
2007年の文化センター建設プロジェクトに関わる。
現在スイス在住。

国内活動＊Atividade no Japão

●1月31日 ブラジル料理教室 デザートを堪能！

フェイジョアーダ、ブリガデイロ、ブラジルプデン・・・

今回は、前回の料理教室で大好評だったブラジルプデン研究家中津さんのブラジルプデンの作り方を教えてもらいました。また、ブラジルの子どもたちに大人気のチョコレートのお菓子ブリガデイロをみんなでワイワイおしゃべりしながら作りました。メインは、豚肉をふんだんに使ったブラジルの伝統料理フェイジョアーダを作ってみみんなで美味しく頂きました。



●3月20日 光の子どもたちの会 総会

2015年8月5日に法人格を取得し、「特定非営利活動法人 光の子どもたちの会」となってから初めての総会。代表の鈴木真由美及びスタッフより、活動報告及びJICA草の根技術協力事業の実践報告を行いました。JICA草の根技術協力事業は2013年3月より2015年8月まで実施し、その成果品の一つである、青少年に行ったライフスキルトレーニングの教本を参加者の皆さんに配布しました。2016年5月からはカノア・ケブラーダ地区だけではなく、アラカチ市内6地域、10校に対して事業を展開していくこととなります。これら事業に関しては引き続きご報告していく予定です。

こじんまりした会でしたが、活動報告の写真を見ながら感想を言い合ったり、出席頂いた方からアドバイスを貰ったりと、この会がたくさんの方々を支えられていることを実感する貴重な場になりました。今後も一歩ずつではありますが、スタッフ一同、活動を盛り上げて行きたいと思っております。

ご参加頂いた皆様、ありがとうございました！今後とも宜しくお願いします。



●5月29日 ブラジル料理教室 バカリヤウ

バカリヤウ、にんじんケーキ、グリーンサラダ

バカリヤウとは、タラの塩漬けの干物のことを言います。今回はエレナ先生の独自のレシピで日本で手に入るタラを使って作れる料理を教えてくださいました。また、それに加えてレモン汁のドレッシングがおいしいグリーンサラダ、チョコレートソースがかかったにんじんケーキを作ってみみんなで食べました。今回は、いつも料理教室を運営してくれていたスタッフの谷村祥子さんが、6月末からJICAの日系社会青年ボランティアでブラジルに2年間行くので、渡伯前の最後の料理教室となりました。同じ日系社会青年ボランティア、シニアボランティアの仲間をたくさん連れてきてくれて、今回も総勢15名のブラジルトークに花の咲く楽しい料理教室となりました！祥子さん、行ってらっしゃい！！



活動計算書

2015年 1月 1日 ～ 2015年 12月 31日 まで

(単位:円)

科 目	金 額	
I 経常収益		
1. 受取会費		
正会員受取会費	13,500	13,500
2. 受取寄付金		
受取寄付金	2,057,078	
学資支援費	0	
修繕支援金	51,000	
サッカー支援金	5,000	
音楽支援金	52,728	2,165,806
3. 受取助成金等		
LUSHジャパン	495,000	
かながわ民際協力基金	190,000	685,000
4. 事業収益		
物品販売	130,830	
JICA草の根技術協力型	1,982,605	2,113,435
5. その他収益		
受取利息	18	18
経常収益計		4,977,759
II 経常費用		
1. 事業費		
(1) 人件費		
給料手当	1,352,696	
人件費計	1,352,696	
(2) その他経費		
保育園事業	43,804	
音楽支援事業	44,227	
施設維持費	49,082	
学資支援費	43,133	
LUSHジャパン	124,559	
かながわ民際協力基金	712,029	
JICA草の根技術協力事業	2,602,164	
その他経費計	3,618,998	
事業費計		4,971,694
2. 管理費		
(1) 人件費		
人件費計	0	
(2) その他経費		
雑費	71,758	
その他経費計	71,758	
管理費計		71,758
経常費用計		5,043,452
当期正味財産増減額		△ 65,693
前期繰越正味財産額		555,648
次期繰越正味財産額		489,955

ありがとうございます＊Obrigado

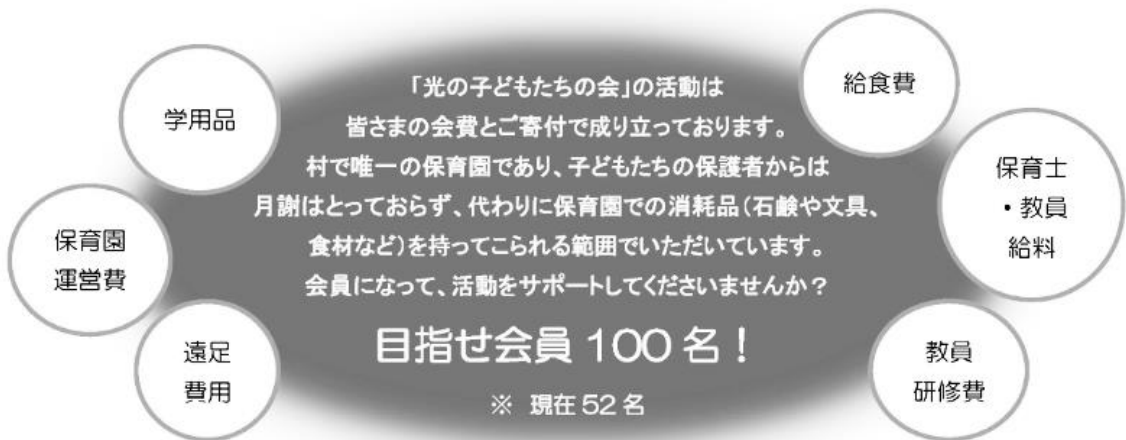
会費及び寄付を頂きました皆さま及び物資支援を頂きました皆さまのお名前を下記に記載いたしました。
この場をお借りして、心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。
これからも一人でも多くの方に会員になって頂き、カノアの活動を共に支えていただけると嬉しいです。

会費及び寄付を頂きました皆さま（以下順不同）

安見清・道子さま、安藤一樹さま、石田泰三・まどかさま、稲垣由紀さま、岩本ともみさま、太田朋子さま、大谷タカコさま、桑山寛子さま、田中千鶴子さま、長谷川宏さま、馬場悠男さま、堀池眞輔・ミツ子さま、三浦佐千夫さま、村上誠さま、吉田可南子さま

物資支援をいただきました皆さま（以下順不同）

横浜市立栗田谷中学校の皆さま



年会費（五千元）・ご寄付のお振込み方法は4つ

1. 自動引き落としによる振込み

自動引き落とし希望の口座のある金融機関で手続きができます。引き落とし日、金額をご指定いただけます。尚、ゆうちょ銀行の場合は以下の〈2. 郵便振替〉と同じ口座番号ですが、他金融機関からの振込の場合には〈3. ゆうちょ銀行振込〉の口座番号となりますので、ご確認ください。

2. 郵便振替

口座番号: 00280-1-41787

加入者: 光の子どもたち-カノアの活動を支える会

3. ゆうちょ銀行振込

名義: 光の子どもたちの会 店名: ○二八(ゼロニハチ)
店番号: 928 普通預金 口座番号: 5552598

4. インターネットよりクレジットカードで振り込み

光の子どもたちの会ホームページ

(<http://criancasdeluz.org/inicial/index.jp.html>)より、
お振込みいただけます。

お問い合わせ先: 代表 鈴木真由美、日本事務局長 堀池眞輔

〒221-0841 神奈川県横浜市神奈川区松本町 1-7-1 TEL/FAX 045-321-1824 info@criancasdeluz.org

フェイスブック「光の子どもたちの会」 ホームページ: <http://criancasdeluz.org>